

青森中央学院大学・青森中央短期大学 図書館情報センターにおけるサービス実践報告

ACGU ACJC Library and Information Center Two-Year Activity Report

下山 佳那子

Kanako SHIMOYAMA

青森中央短期大学 食物栄養学科

Department of Food Dietetics, Aomori Chuo Junior College

Key words ; 大学図書館、ラーニングcommons、選書ツアー

1. 背景

青森中央学院大学・青森中央短期大学図書館情報センターは、主な利用対象を同校に所属する学生や教職員とし、一般開放も行っている。学校法人青森田中学園の設置校全体の在籍学生数は、2015年10月現在1,252人であり、その内訳は、表1の通りである。

表1. 青森田中学園設置校 学生数 (2015年10月現在)

学校名(人)	学部・学科・課程(人)	学年	人数
青森中央 学院大学(808)	経営法学部 (602)	1	188
		2	141
		3	150
		4	123
	看護学部 (183)	1	92
		2	91
地域マネジメント 研究科 (23)	1	10	
	2	13	
青森中央 短期大学(380)	食物栄養学科(126)	1	62
		2	64
	幼児保育学科(167)	1	85
		2	82
	看護学科 (81)	3	81
専攻科福祉専攻(6)		6	
青森中央 経理専門学校(52)	商業実務課程 (52)	1	31
		2	21
青森中央 文化専門学校(12)	服飾課程 (12)	1	8
		2	4

同センターにおける近年の大きな動きとしては、平成26年4月、図書館にラーニングコモンズ（以下、LCスペースと表す）スペースが開設されたことがある。LCには様々な定義があるが、本稿では文部科学省 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会（2010）による「複数の学生が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの。その際、コンピュータ設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを使った学生の自学自習を支援する図書館職員によるサービスも提供する¹」ものとする。本学でのLCスペースは、一切の会話を禁ずるサイレントスペースと区別し、学修会話を可能とする場として運用している。

筆者は、教員として司書課程の科目を担当するとともに、平成26・27年度の2年間、図書館情報センター委員会の委員を務めた。その間、本学図書館において様々なサービスの改善や、新サービスの実践がなされたが、本稿では、その中から筆者が主に関与したものについて報告する。第2章ではLCに関連する活動やサービス、第3章ではLCに関連しないものとして、書架見出しの設置と、学生選書ツアーの実施について述べる。なお、書架見出しの設置は、アクティブ・ラーニングとして授業の一環で実施したものである。

2. LCに関連する活動やサービス

LCは、先述したように、場を設置するだけでなく、その場における人的支援も必要となる。ただし、本学では図書館のメインカウンターとLCが離れており、かつ図書館職員は人数の都合上、LCへの常駐が難しい。そこで筆者は、他大学でも実践のある学生チューターの配置を提案し、本学での導入の是非を検討するため、まずLCの利用状況およびチューターのニーズを調査した。

2.1. LC利用状況調査、チューターのニーズ調査

LCの利用状況およびチューターのニーズ調査は、LCカウンターにおいて、職員1名と筆者が週替わりで週に1度⁽¹⁾計20回行った。調査期間は、平成26年9月22日から平成27年3月9日である。

利用状況調査では、学生の利用行動を観察し、個人が特定されない範囲でその様子や考察を記録した。図書館のルールやマナーに違反する行動であると、調査実施者が判断したものについては、その場で適宜注意を行い、その際の様子も記録した。次に、チューターのニーズ調査では、利用者から質問などを試験的に受け付けることを掲示し、受けた質問とそれに対する調査実施者の回答を記録した。すべての記録は、文書で作成した。

利用状況調査の結果、いわばLCの使われ方として望ましい「教え合い、学び合い」「ディスカッション」がなされていた一方で、ルールやマナーの違反として「学修以外の内容を大声で会話」「スマートフォンのスピーカーによる音楽再生」「口笛」「携帯電話での通話」「ふた付き飲み物以外の飲食」「館内での写真撮影」「座席への荷物の放置」が確認された。また、チューターのニーズ調査では、LC内のプリンタの使用方法など、主に情報機器に関連する質問が寄せられた。

(1) 月曜13～15時の2時間を基本としたが、やむを得ず都合がつかない場合には、時間帯や曜日を変更して実施した。

ルールやマナーに違反する行動の背景には、新しく設置された LC スペースの利用方法を十分に理解する機会のないまま利用している場合や、利用方法は把握しているものの、教職員の目が届かない場所であるため軽んじてしまう場合があると考えられる。いずれの場合においても、本学の LC は学修環境として整備する必要があり、チューターは、ルールやマナー違反を行う学生への注意喚起、および学修に使用する情報機器や資料に関する質問への回答の役割を通じて、その一助となることができると推測できた。

2.2. LC 学生チューター制度の整備

学生チューターの候補の検討にあたって、専門的な情報探索の技術を習得した者であれば、資料に関する利用者からの質問に対応できると考え、情報サービス論および情報サービス演習の科目を履修する司書課程の学生を第1の対象とすることとした。二つの授業を実施する時期の都合上、主に短期大学2年生が履修する司書課程の授業において、チューター業務の概要を説明し、勤務希望者を募った。その結果、短期大学食物栄養学科2年生3名、同幼児保育学科2年生1名、計4名から応募の意思があった。また、同時期に学習支援センターが運用する制度である「ワークスタディ」が検討されており、協議の結果 LC 学生チューターもこの制度のもとで運用することが決定した。

さらに筆者は、学生チューターの勤務前に、1) 記録簿の整備、2) 勤務マニュアルの作成、3) 事前研修を行った。まず、記録簿は、チューターが勤務の際に行った活動内容を記録するものであり、かつ他の学生チューター、図書館職員、筆者との間でその記録を共有することとした。情報を共有することで、勤務時に困難に感じたことなどについて、立場の異なる複数の視点からより良い対応を考察できるという利点がある。次に、勤務マニュアルは、チューターおよび勤務の概要や、各業務の具体的な説明、記録作成について記載し、A4用紙2枚の分量で作成した。最後に、勤務マニュアルを用いて、すべての学生チューターに対しておよそ30分の事前研修を行った。

2.3. 実施の状況と今後の課題

学生チューターには学業を優先させるようにという学科からの意見を反映させ、1名あたり週1度18～20時の2時間の勤務を基本とした。なお、勤務を希望する学生が4名であったことから、平日5日中の1日は筆者がチューターとして勤務することとした。

平成27年6月15日から平成28年1月8日現在まで、のべ勤務日数は63日間⁽²⁾であり、その間37件の質問への回答と、134件の活動（注意喚起や書架整理など）を行ってきた。これらから、学生チューターが一定程度の役割を果たしていることがわかる。

平成28年1月時点で、28年度以降もチューターの制度を維持していくことが決定している。しかし、今年度の司書課程の1年生を対象に募集したところ、応募は3名からのみであった。また、利用者からのこれまでの質問の内容を見る限り、情報探索に関する質問は多くないため、司書課程の学生に限らず人材を募集することも検討の余地がある。

最後に、LC の利用に関する周知の方法を考察する。現在の利用者へは、館内掲示物や学生チュー

(2) 図書館の開館時間短縮日や長期休業中には勤務していない。

ターを通じて適宜周知し、新入生に対しては、新入生ガイダンスの中で図書館職員が広報している。ただし、LC 設置以前の入学生で潜在的な利用者に対しては、周知の機会が十分であるとは言えない。そこで、図書館情報センターのウェブページにおいて、どのような設備があるのか、どのような利用が可能なのか、体系的に理解できるような情報発信が必要であると言える。具体的には、設備内容のページを充実させることが一案として挙げられる。

3. LC に関連しない活動やサービス

3. 1. 「913 (日本文学)」の書架見出しの設置

平成26年度の授業内で司書課程の学生に、本学図書館を利用するうえで困ったことを尋ねた際に、「開架の資料で貸出中ではないにも関わらず、配架場所を探しても見つからないことがある」という回答を得たことがあった。筆者は、その要因として、資料が請求記号順に並べられていないこと、利用者が並び順を理解していないことの2点があると考えた。利用者が並び順を理解していない場合、一時的に利用した資料を誤った場所に戻されることが増え、結果として配架場所を探しても図書が見つからない書架となってしまう。

一般的に図書館の資料は、図1のような、背ラベルに記載された請求記号に従って配架されている。請求記号の構成は図書館によって様々であるが、本学図書館では、1) 分類記号、2) 著者記号、3) 補助記号の三点で成り立っている。分類記号は、図書の主題を記号であらわしたものであり、本学図書館では、日本十進分類法 (Nippon Decimal Classification : NDC) を採用している。また、著者記号は、主な著者等の姓を表し、本学図書館ではアルファベット表記の一文字目を採用している。補助記号は、シリーズものの巻号などで使用する場合があるとともに、本学図書館の LC スペースでは、書架の番号を丸囲みの数字で記載している場合がある。

さらに、配架の際には、1) から3) の順に優先されることとなり、まず1) の分類記号の順に資料を並べたうえで、分類記号が同一の資料がある場合、それらを2) の著者記号のアルファベット順に並べるという手順をとることになる。

新入生ガイダンスにおいて並び順についても説明がなされているものの、司書課程を履修する学生であっても、これらの規則を授業で学ぶ前に正確に理解している者は少ない。また、公共図書館では著者記号に平仮名やカタカナを用いている場合が多く、アルファベットに慣れない学生にとっては、配列の順序についての理解が一層難しくなる傾向がある。

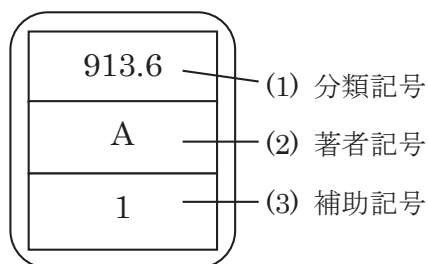


図1. 請求記号の一例

(1) 司書課程科目の授業におけるディスカッション

平成26年度後期の図書館サービス概論（短期大学2年生を主な履修対象とする）では、授業の課題の一つとして、KJ法を用いた受講生のディスカッション（45分）によって本学図書館の課題およびその解決方法を明らかにし、実践することを試みた。その結果、まず課題の一つとして、先述した「書架の乱れによって資料へアクセスできないこと」が挙げられた⁽³⁾。また、その課題の解決方法については、書架見出しをつけるという提案がなされた。

なお、書架見出しについて、学生は書店や公共図書館において、著者名や大きなテーマを記したものを目にしたことがあり、それに準じたものの作成を希望していた。また、特に配架が乱れている書架として、具体的に「913（日本文学）」の分類が挙げられた。この背景には、本学図書館で913の分類記号が付与される資料が多いため、一文字の著者記号のみでは、同一著者の著作をまとめることができず様々な場所に分散して配架されている⁽⁴⁾ということがある。そこで、今回は913の書架に限定し、著者名のみを記した書架見出しの作成と書架整理を行うこととした。

(2) 授業内の作業

授業では、教室での作業、図書館での作業にそれぞれ1コマ分の時間を割いた。教室では、はじめに書架見出しを作成する著者の基準について検討が行われた。事前に図書館より提供してもらっていた913の図書のリストから、同一の著者による著作数が計測された。同じく図書館より使用許可を得た、書架見出しの備品数50セットと照らし合わせ、本学図書館に7冊以上著作の所蔵がある著者を対象に見出しを作成することが決定した。

次に、書架見出しの印字の作業に移った。今回利用した備品は、印字のフォーマットをウェブからダウンロードして使用するものであったため、学生間での作業の分担も容易に行うことができた。

図書館では、書架整理として1) 誤配架の資料を正しい位置へ戻す、2) 同一著者の著作をまとめる、3) 書架見出しを差し込む、という手順で行った。書架見出しの例は、図2の枠線で囲まれた部分に設置されているものである。本来であれば、著者ごとの厳密な並び順にも配慮したいところであったが、今回は時間、人手の制限から優先度を低くせざるを得なかった。

(3) 課題は、「資料の充実」など他にも多数挙げられたが、本稿では課題の解決につながったと言えるものに限定して取り上げた。

(4) 例えば913でAの著者記号が付与される著者には、赤川次郎、芥川龍之介、阿部公房などがおり、一文字の著者記号だけでは、「赤川次郎の著作、芥川龍之介の著作、赤川次郎の著作」という並び順であっても許容されることとなる。このような状況への対策としては、著者記号の桁数を増やしたり、『日本著者記号表』を利用することも考えられる。



図2. 見出し設置後の書架（筆者撮影）

(3) 今後の課題

今回は、913の書架に限定して作業を行い、利用者が資料にアクセスしやすく、かつ資料の並び順を意識できるような書架に近づけることができたと言える。ただし、913の書架以外の場所でも、ある程度の整理された状態を保つためには、請求記号への利用者の意識を高めることが不可欠であると言える。その方策については、第4章で述べる。

3.2. 学生選書ツアーの実施

本学では、所属学生がニーズを直接的に資料購入に反映させる手段として、図書リクエストの制度を設けている。しかし、より積極的に学生の図書館利用および読書を推進していくことを目的とし、学生選書ツアーを実施することとした。

学生選書ツアーとは、学生が街の書店で本を手に取りながら、図書館に置いてほしい本を選ぶ企画である。参加者の人数、予算、実施の頻度などを検討するにあたって、大阪産業大学総合図書館(2009)による「学生選書に関するアンケート集計結果」² およびウェブで収集した他大学の事例を参考にした。

他大学の学生選書ツアーに関する情報収集は、大まかな傾向をつかむことを目的として実施した。調査の対象は、ウェブ上で学生選書ツアーの概要を公開している大学とし、サーチエンジンを用いて収集を行った。調査期間は、平成26年12月1日から15日の15日間である。また、学生選書ツアーは国公立大学でも実施されているが、予算の規模などの違いを考慮し、今回は本学に学制などの類似した、私立の短期大学および短期大学・四年制大学の併設校の事例を参考にすることとした。結果は表2の通りである。

表2. 他大学の学生選書ツアー実施概要（私立短期大学、短期大学・四年制大学併設校）

	都道府県	学制	設置	大学名	予算	頻度	対象	特記事項
1	北海道	短期	私立	帯広大谷短期大学	—	—	図書館ボランティア	
2	福井県	短期	私立	仁愛女子短期大学	10,000/1人	2回/年	図書館サポーター	
3	埼玉県	短期・四年制	私立	十文字学園女子大学 短期大学部・十文字学園女子大学	—	—	ライブラリーサポーター	POPの作成
4	東京都	短期	私立	湖北短期大学	—	—	公募	事後活動(2点程度のPOPの作成)
5	東京都	短期・四年制	私立	共立女子短期大学・共立女子大学	—	—	学生図書委員会	POPの作成
6	東京都	短期・四年制	私立	日本大学短期大学部・日本大学理工学部	—	—	公募	購入希望のテーマを事前に提出
7	神奈川県	短期	私立	和泉短期大学	—	2回/年	図書館サポーター	事前調査による購入と当日の購入の計60冊、POP作成
8	神奈川県	短期・四年制	私立	鶴見大学短期大学部・鶴見大学	—	2回/年	公募14名	定員超過の場合は初参加者を優先
9	静岡県	短期・四年制	私立	常葉大学短期大学部・常葉大学	—	—	各学科1～2名、図書館をよく利用する学生	事前に選書方針の伝達、学生による選択後 図書委員会による承認が必要
10	愛知県	短期・四年制	私立	名古屋経済大学短期大学部・名古屋経済大学	—	—	公募	
11	愛知県	短期	私立	名古屋女子大学	10,000/1人	—	公募(各学科2名まで)	15分の事前説明、事後活動(POPの作成)
12	京都府	短期・四年制	私立	京都文教短期大学・京都文教大学	—	2回/年	公募(大学・短大で各10名)	
13	大阪府	短期	私立	大阪千代田短期大学	—	2回/年	公募	事前説明会
14	大阪府	短期・四年制	私立	東大阪大学短期大学部・東大阪大学	—	2回/年	公募	参加者に記念品と500円QUOカード進呈
15	大阪府	短期	私立	大阪女子短期大学	—	—	公募	
16	兵庫県	短期・四年制	私立	夙川学院短期大学・夙川学院大学	—	—	公募	学生による選択後 選書委員会で審議
17	鳥取県	短期・四年制	私立	鳥取短期大学・鳥取看護大学	—	2回/年	—	50冊選定
18	島根県	短期・四年制	公立	島根県立大学短期大学部専攻科・島根県立大学	—	—	学生図書委員	
19	福岡県	短期	私立	福岡工業短期大学部	20,000/1人	2回/年	公募10名	
20	福岡県	短期・四年制	私立	近畿大学九州短期大学・近畿大学	—	—	公募	四大と短期大学部の合同企画
21	福岡県	短期	私立	九州大谷短期大学	—	—	公募8名(実施は9名)	
22	佐賀県	短期・四年制	私立	西九州大学短期大学部・西九州大学	—	—	公募20名、先着	四大と短期大学部の合同企画、事前説明会
23	佐賀県	短期	私立	九州龍谷短期大学	—	—	図書サークルの学生、教職員	

注) 表中の「—」の記号は、ウェブページから明らかにならなかった項目であることを表す。

調査により、予算は一人あたり1、2万円、実施頻度は1年に2度の事例が確認されたが、本学は今年度が初の実施であることから規模を縮小し、予算は学科2名につき8千円、実施頻度は1年に1度とした。次に、対象者は、多様な学生の意見を反映させるため公募とし、かつ学科で2名までとした⁵⁾。次に、事前説明や、事後活動としてPOP作成を行う事例が多く確認されたことから、本学においても、事前ガイダンス、および事後活動としてのPOP作成を行うこととした。最後に、参加特典については、以前から本学図書館で実施している「読書マラソンスタンプ⁶⁾」10個分とした。

(1) 事前準備

参加学生の募集、事前ガイダンスについて述べる⁽⁷⁾。

参加学生の募集期間は、初め平成27年6月1日～12日に設定していた。しかし、期限までに参加者が集まらなかったため、同月19日に締め切りを延長するとともに、各校および各学科の教員に呼びかけを依頼した。

事前ガイダンスは、6月25日（木）放課後に実施した。およそ20分の時間を用いて、今回の選書の基準が「学習や研究調査のために図書館に必要であるもの、みんなに読んでほしいもの」であること、選定予算、当日の流れ、参加特典について説明した。

(2) 実施当日

平成27年6月27日（土）9：20～15：00に実施した。午前は、本学から書店へ移動し、学生が書店で選定を終え、引率者が購入の手続きを終えた後に本学へ戻った。移動にはスクールバスを利用した。また、午後は、図書館内で、選書した図書に関するPOPを作成した。

参加者は、青森中央学院大学生・大学院生5名、青森中央短期大学生5名、青森中央文化専門学校生2名、青森中央経理専門学校生2名の計14名であり、引率は図書館職員2名と筆者で行った。実施場所は、成田本店しんまち店である。

引率者は、移動前後での参加者の人数確認、一般の書店利用者に対する配慮への注意喚起のほか、学生が選定した図書に対して、1）選書方針に沿っているか、2）本学図書館に所蔵がないかの2点を確認した。所蔵の有無の確認には、タブレット型電子端末を用いた。

(3) 実施の結果

計43冊の図書の選定が行われた⁽⁸⁾。また、学生選書ツアー終了後に、参加学生11名⁽⁹⁾ に実施したアンケートの結果を以下に抜粋して示す。

-
- (5) 同一の所属から3名の応募があった場合には、学生に確認のうえ、2名分の予算を3人で選定することとした。
 - (6) 本学図書館の資料について読後の感想を記入した場合、1冊につき1つのスタンプが得られ、12個のスタンプでカフェテリア・購買の利用券千円分と引き換えることができる。
 - (7) 図書館職員によって、POP作成作業の会場設営も行われた。色画用紙、ペン、はさみ、穴あけパンチなどの筆記用具が用意された。
 - (8) 選定された図書の一覧は、本学ウェブページで公開している。
<http://www.aomoricgu.ac.jp/wp-content/uploads/201507edited.pdf>
 - (9) 総参加学生14名のうち、学校行事などの都合により、当日は午前中の選定のみ参加となった者が3名いた。ただし、その3名も後日POPの作成を行った。

Q 1. ツアーの実施時期は、適切でしたか。

はい 7人 どちらでもない 4人 いいえ 0人

[希望] 実習がない時期（2名）、8月くらい、就活があまり進んでない5月とか

Q 2. 予算（学科で8,000円）は適切でしたか。

多い 2人 適切 7人 少ない 2人

[希望] 1～1.5万、1万円、5千円

Q 3. 成田本店には、欲しい本がありましたか。

はい 10人 どちらでもない 1人 いいえ 0人

[希望] レシピ本・ビジネス書（就活）、分野・ジャンルにより種類が少ない

Q 4. 選定時間（2時間）は適切でしたか。

短い 0人 適切 8人 長い 3人

[希望] 1～1.5時間、90分（2名）

Q 5. POP 作成時間（90分）は適切でしたか。

短い 4人 適切 7人 長い 0人

[希望] 120分（2名）

Q 6. 参加特典（スタンプ10／12個）は、魅力的でしたか。

はい 7人 どちらでもない 4人 いいえ 0人

Q 7. 選書ツアーを、今回参加しなかった友人に薦めたいですか。

はい 10人 どちらでもない 1人 いいえ 0人

実施時期、選定金額、各作業の時間については、今後、検討する余地があるといえるが、Q 7の回答を見る限り、参加学生にとってはじっくりと図書と触れ合う良い機会となったと言える。感想の自由記述でも、選書については「普段なかなか書店に足を運ぶ機会がないので、関心のある本を色々と見ることができ、楽しかった」「一緒に参加した友人から、おススメを教えてもらい、興味が広がった。読みたいと思う本がたくさん見つけられた」、POP作成については、「POP作成をすることで、選んだ本の内容や良さを改めて見つけられた」「デザインは苦手だったけれど、いざ始めてみたら楽しかった」と、肯定的な内容が多かった。

4. まとめ

本稿では、平成26・27年度の図書館情報センターの活動の中で、筆者が主に関わった、LC学生チューターの整備、書架見出しの設置、学生選書ツアーについて報告した。今後の展望としては、配架や図書館利用に関するルールやマナーを学生に周知するため、学生が楽しみながら学ぶ機会がある

とよいと考えている。例えば、他大学の図書館で、脱出ゲームのようなゲーム形式を取り入れている事例がある³。作問などに労力がかかることも予想されるが、それについては、例えば司書課程の学生に授業の一環として取り組む時間を設けることも対策の一つとして考えられる。

利用者に活用され、利用しやすい図書館環境の整備方法を、今後も考察していきたい。

謝 辞

本稿に記した図書館サービスの改善および実践を行ううえで、図書館情報センター長の三田禮造先生、図書館情報センターリーダーの葛西崇文さん、図書館情報センター職員の鳴海晴美さん、福岡千絵さん、松山恵美さんに大変なご支援、ご協力をいただいた。ここに感謝を表す。

引用・参考文献

- ¹ 文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会：大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm、文部科学省ホームページ、2010.
- ² 大阪産業大学総合図書館：学生選書に関するアンケート集計結果、<http://www.osaka-sandai.ac.jp/lib/activity/questionnaire.html>、2009.
- ³ 長谷川敦史：大学図書館における「脱出ゲーム」とゲーミフィケーションの可能性、ふみくら：早稲田大学図書館年報、no. 87、p. 2-4、2015.